石田純郎著『ヨーロッパ医科学史散歩』

医史学会会員の中には、ヨーロッパ諸国を旅行された際、意外な所に医学にまつわる物を発見して驚かれた経験をおもちの方もいらっしゃるかと思う。あるいは医史跡めぐりを旅の主目的として、ヨーロッパに行かれる方も多いのではないだろうか。そのような人々のために、是非ともお薦めしたいのがこの本である。

著者の石田純郎氏は、オランダ国立ライデン大学客員教授として渡欧された一九九〇年以来精力的にヨーロッパ各国の医史跡や医科学史博物館などを訪ね始めたという。帰国後も毎年のようにヨーロッパにでかけ、訪問した国は5年間で十七ヵ国に達した。

その成果は、平成三年から六年まで計三十六回にわたって日本医事新報に連載された「ヨーロッパ医史跡散歩」となって発表された。この連載を元にして、大幅に加筆され、最近のデータも追加されてできたのがこの本である。こうして一冊にまとめられた際、タイトルが連載時の「ヨーロッパ医史跡散歩」から「ヨーロッパ医科学史散歩」に変更されたことからわかるように、この本は単に医史跡をめぐるためのガイドというだけでなく、広くヨーロッパにおける医科学の発達の歴史を、わが国との関係までも含めて、わかりやすく紹介しているのである。

この本には、著者が連載終了後に訪れた国と、まだ訪れていない国も含めて二十五ヵ国、三七〇施設が紹介されており、内容も豊富だが、体裁も改められて、大変読みやすいものとなっている。

例えば、各国の冒頭部に「概要」が加えられ、医学的背景のみならず治安や交通なども紹介してあるので、その国の状況が容易に把握されるようになっている。また、施設名の後に星印が付けられ、三つ星から無印までの四段階で重要度が表示される。しかも絶対見逃せない医史跡を十九ヵ所選んでくれている、という心遣いまである。

内容的には、著者が留学したオランダについて最もページが割かれており、当然のことながら詳しい。次いで、フランス、ドイツについての記述も充実している。ギリシャ・トルコにおけるアスクレピオスの神殿についての記載は、五施設を比較した素晴らしいものであり、ハンガリーの多数の薬局博物館・保存薬局も他国にみられない特徴的なものである。著者は医史跡めぐりに疲れると、足を休めるために、そして乾いた喉をいやすために、よくカフェでビールを飲まれるようで、文中「ビール」という言葉を多く見つけることができる。それどころか、イギリスのロンドンではジョン・スノー・パブまで紹介している。またドイツやフランスになるとワインの話がおのずと出てくるが、医学と決して無縁ではないことがフランスのボーヌのオテル・デューに行けば納得できるのである。

本文を読んでいても一服できるように、所々にコラムが加えられている。このコラムが楽しいもので、「安くておいしいレストランの見つけ方」、「経済的な宿の見つけ方」、更にはクレジットカードの優劣を論じるなど、旅行における有益なアドバイスが豊富で、『地球の歩き方　オランダ・ベルギー編』という旅行ガイドブックの著者ならではのものがある。

著者はパリで釣銭をごまかされ憤慨し、ドイツやギリシャの対日感情の良さ、ハンガリー人の素朴で誠実な国民性に驚いている。

一方、ウィーンでの慇懃無礼な観光業に携わる人々との不愉快な経験をし、オランダ人の計算高さに辟易し、トルコ人は日本語のうまい民族だとたたえている。

著者はこのように各国で様々な体験をし、新たな発見をしているが、それらに対する考察がおのずと文化批評となっている。

ところで、自分は何施設くらい見ているか数えてみたところ、まだ四ヵ国二十二施設であった。こんな便利なものができたのだから、利用しない手はないではないか！　さあこの本を片手にヨーロッパへ行こう。

（今泉　孝）

〔考古堂書院：新潟市古町通四、電話〇二五-二二九-四〇五八、一九九六年、A5判、二四八頁、三五〇〇円〕

杉田暉道・長門谷洋治・平尾真智子・石原明著
系統看護学講座別巻9『看　護　史』

教育カリキュラムにおいては、看護史も医学史も同じ「部屋住み」の身である。それぞれ看護学総論、医学概論という大部屋を間仕切りした一郭に、出番を待つ素振りもあまり見せず、ひっそりとたたずんでいるといった体である。大学の中にポストがなければ、予算はつかず、人材もまた育ちがたいのである。

このような現状は文部行政の浅薄さを意味するものであるが、同時に、それを変えさせる努力を怠ってきた研究者の側にも問題があったといえる。

第一に、研究の多くが現代の社会が抱えているさまざまな矛盾、解決を迫まられている課題といったものに根ざしていないために、医療現場で働く者にとって看護史や医学史が魅力に欠けたものとなっていること。それゆえに、不用不急なものとみなされ、冷遇されることになったのである。

研究者は過去の事実を掘りおこすことにどんな意味があるのか、という問いから出発すべきであり、それがなければ道楽と化すおそれが生じてしまう。

第二に、個別な過去における事象研究や地域研究、あるいは現代社会に生きる人々の行動や思惟、事象といったものを、全体の歴史の流れの中にきちんと位置づける十分な努力を欠いたために、歴史事象が持っている意味の現代性を明らかに